

都々逸坊湯本温泉逗留記

白 岩 都司子

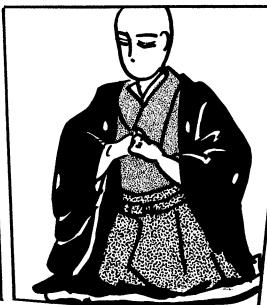
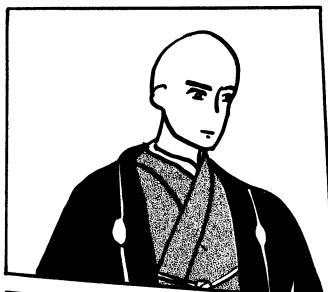
いわき湯本温泉は、「二箱の御湯」と呼ばれ、奈良時代からその名が知られています。日本五古湯のひとつにも数えられ、泉質は、含硫黄・ナトリウム塩化物・硫酸塩で、皮膚病、リウマチ、婦人病などに効能があります。

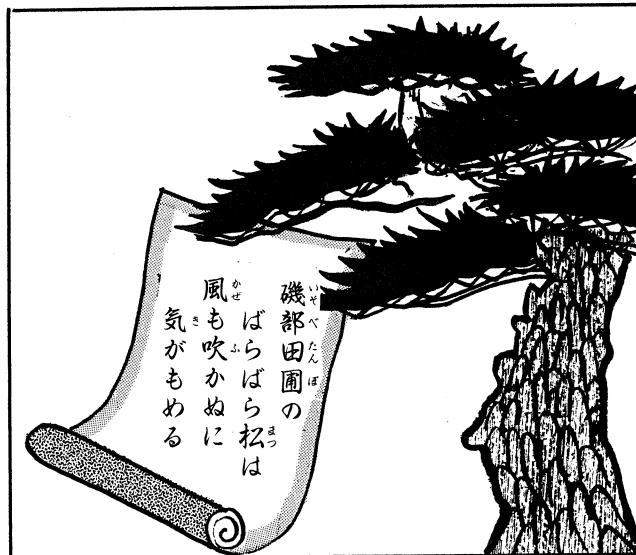
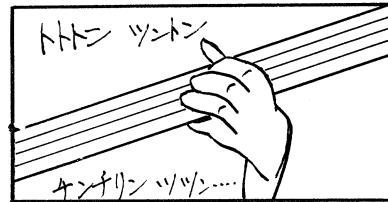
江戸時代にドドイツの名人として名をとどろかせた都々逸坊扇歌も、若いころ、この湯本や上遠野の地で修業に励んだと伝えられています。

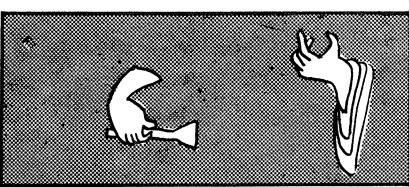
都々逸坊

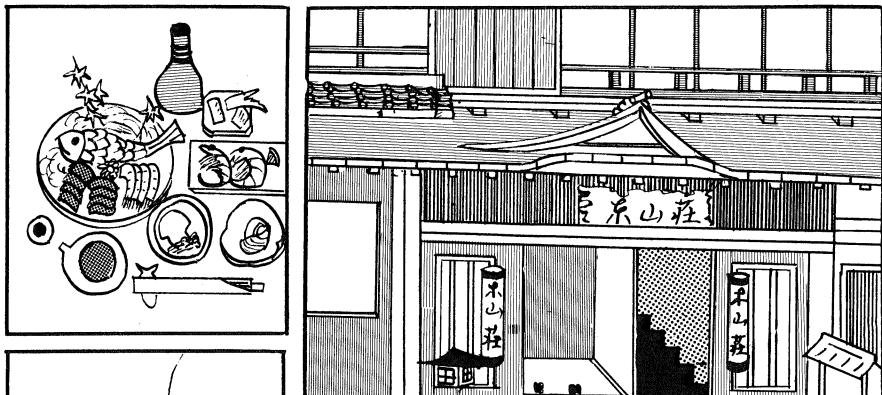
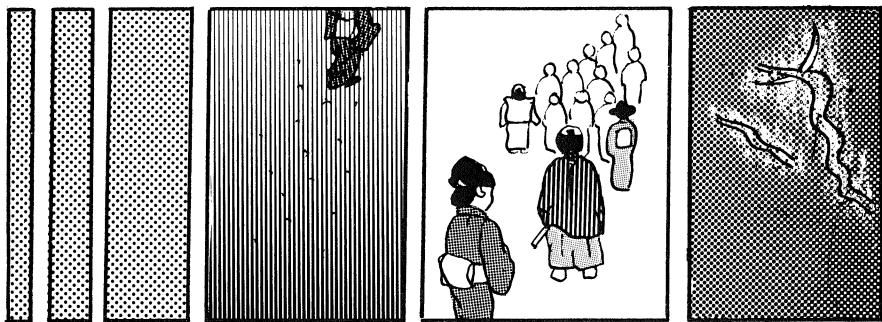
湯本温泉 逗留記

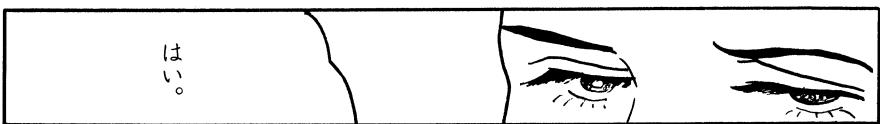
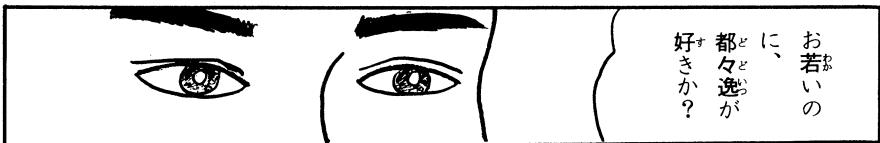
白岩都同子









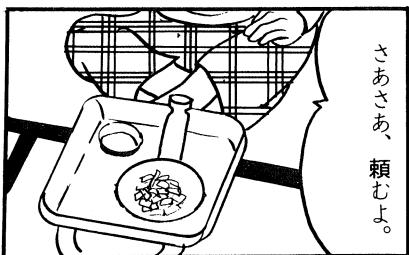
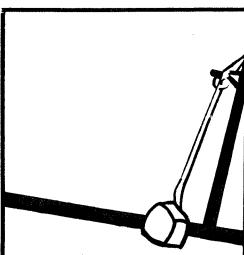
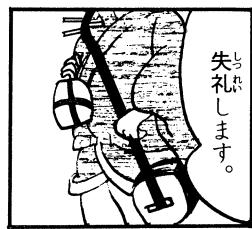


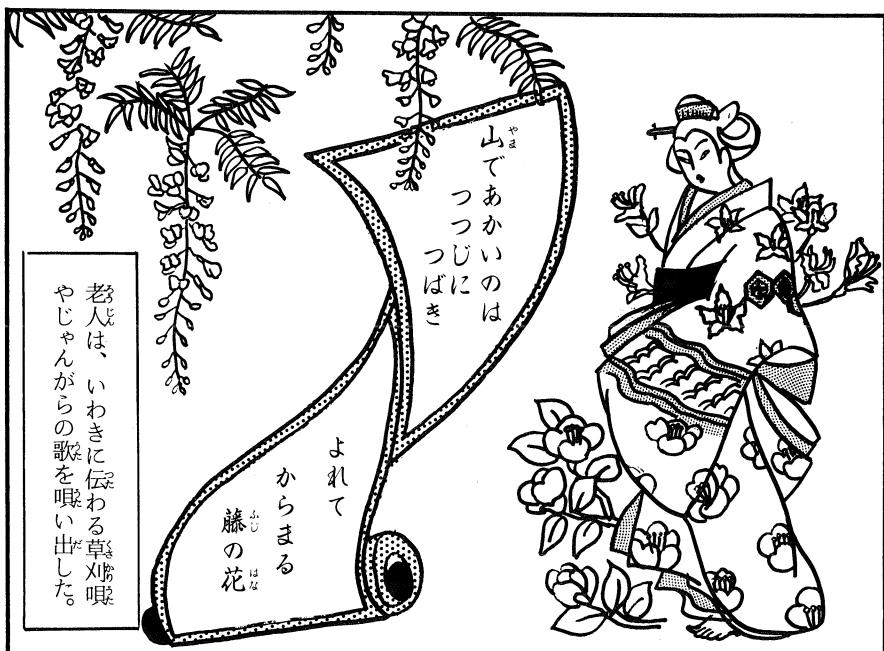
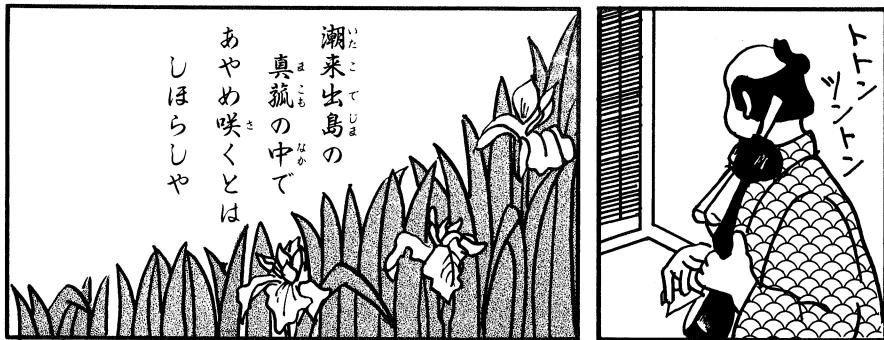


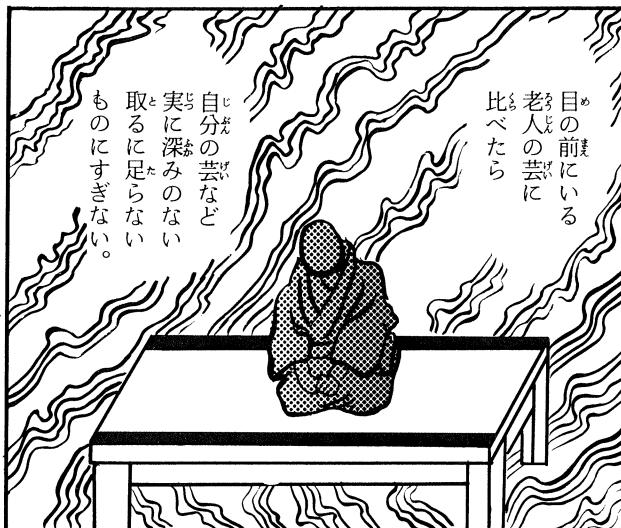
宿は、街道を往来する旅人や近郷の百姓や町人などで、毎晩、上を下への大賑いだった。また、長逗留をする湯治客もひっきりなしでござります。

その当時の湯本温泉は、浜街道唯一の温泉のある宿場町として大いに栄え、湯壺の数は五十を超えたろうか。

十九の時だった。唄の芸を磨こうと、旅修業していた折、いわきの湯本温泉で、ひとりの老人に出会つてな。







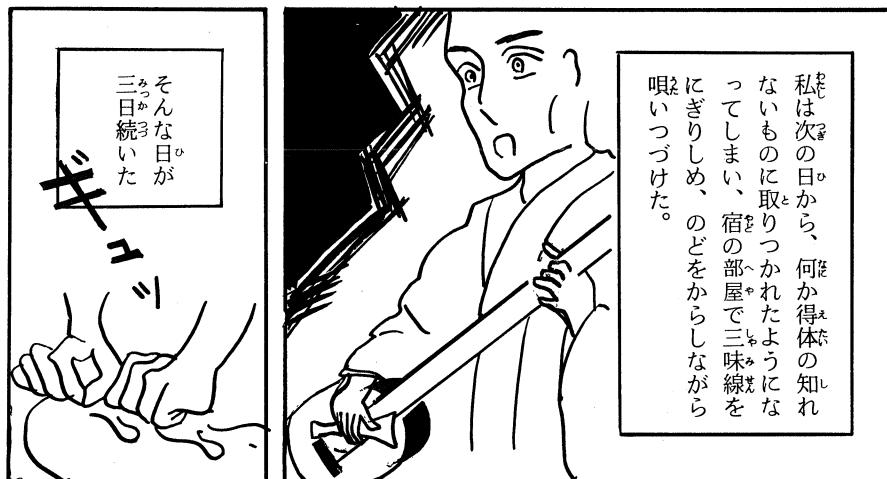
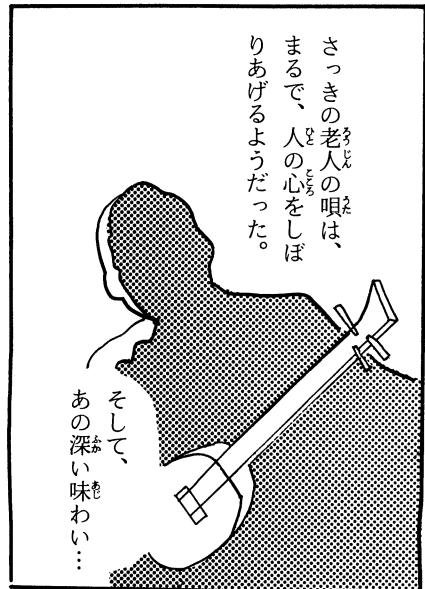
波みのある声
凹熟した
節まわし…

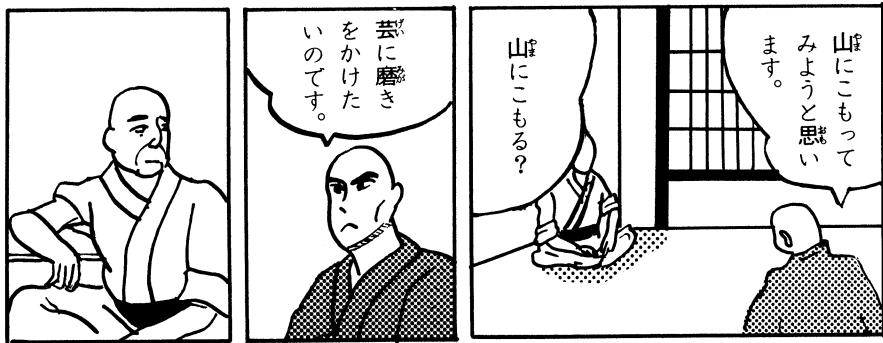
ハリ そして
何よりも
人の心を
ふるわせる
魅力がある。

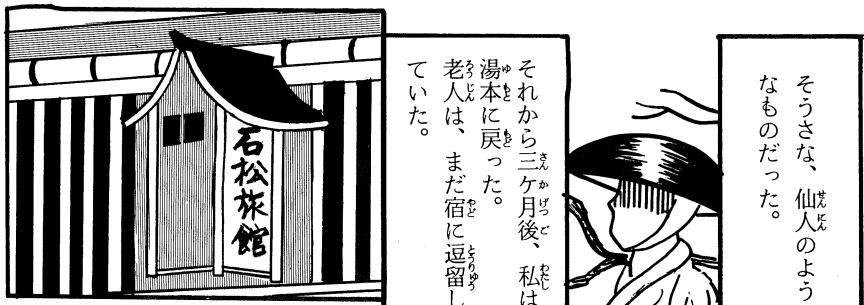


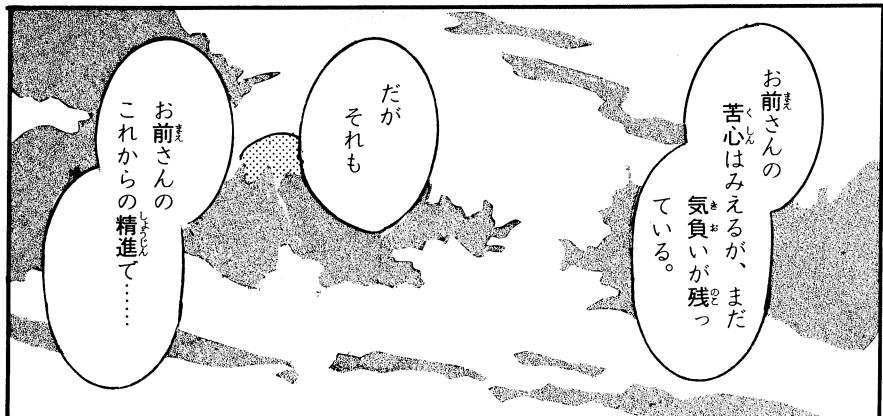
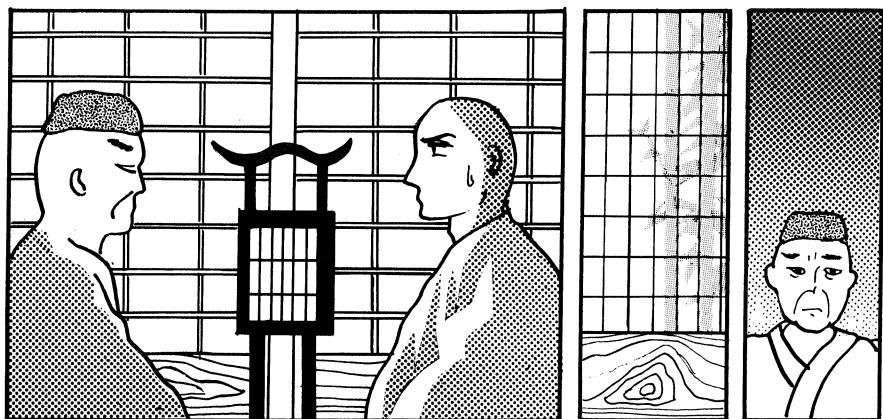
この唄はなア、恋女房に病死
されてしまつた若い亭主が、気
も狂わんばかりに哀しみ、夜に
なると毎晩のように、恋女房の
面影を追い、家の裏の田圃に出
て泣いていた。

そのうち季節が移り、螢の飛
び交う時節になつたのだろう。
そのゆらゆらと飛び交う螢の光
が恋女房の魂のように見え、な
お一層その男は嘆き悲しんだと
いう物語を唄つたものじや。













すばらし
い宝を手
に入れた
のオ

